アーティストインタビュー
鈴木拓さん

—演劇との出会いっていうところを聞かせていただいてもいいですか？

鈴木：高校演劇からで。ただ、最初、高校生、高校に入った時は地学部。地学部も結構、地学には全く興味がなくて、学校の屋上が唯一地学部が使えるっていうので地学部に入って。中学からの連れと毎日屋上で遊んでた。みたいな時に、また別な中学校の時の同級生から、演劇部が単独公演やると。で、その日が初めてできた彼女の誕生日だからどうしても行きたくないんだと。立ってるだけの役だから、代わってくれって言われて、4、5日公欠になればいいかと思って行ったら、面白かったんだよね。うち、実家、大工だったので、子供の頃からよくうちの父親手伝ってて、物作るの好きだったってこともあり。舞台美術を、当時美術の先生やってたんだけど、それ手伝ったのがきっかけかな。これが一応表向きのきれいなほうの理由で、本当の理由は、そのあと初めて付き合うことになる1個上の先輩に惚れたから、かな。あるあるです、だから（笑）。

—1個上の人が演劇部だった。

鈴木：演劇部だったのよ。そうそうそう。で、周りからもはやし立てられ。要するに釘打ったりとか木切ったりとかはできたから、重宝されて、現場でも。美術の先生も、面白い人だったんだけど、俺、毎回演劇部の公演に借り出されてるから、お前入って手伝ってみたいなこと言われて、じゃあいいかなっていうんで入ったって感じかな。

—楽しかったっていうのは具体的にはどういう。

鈴木：その時は、でもあまり演劇的な楽しさっていうよりかは、自分が演じるなんてことは全く興味なかったし、なんていうかな、みんなそれぞれいろんな職能を使って 1 つのものを作るっていう行為が楽しかった。から別に演劇である必要はなかったんだけど、初めて集団でものを作るっていうことに触れたっていうことだったかな。だと思うね。そのあといろんな作品に出会って、演劇的な面

白さっていうのにははまっていくんだけど、きっかけはそんな感じです。

—もうじゃあその時から、何かしら将来的にもそういうふうにやっていこうというふうに思ってたんですか？

鈴木：どうかな。あんまり大学に行く気はもともとなかったし、就職活動くそくらえって思っちゃってたから。それは演劇関係なくね。だから、やりたいこと見つかったし、当時仙台の劇団多かったから、このまま演劇続けてもたぶん自分1人生きていくことは可能だと思ったから。あんまりだからプロになろうとも思ってないし、このままずっと演劇続けようなんて確固たる決意もないけど、25ぐらいまではなんか自分の好きなことやって生きても、なんていうか、親に迷惑かけずに、25ぐらいに残りの人生この仕事で生きていきますって決めればいいかなっていうくらいの感覚が強かったかな。

大河原：いわゆる高校生の時から振り返ると、ものづくりっていう、大道具的なところ、舞台監督っていう職能をお持ちで、そういうところから演劇に携わっていきつつ。ただ、劇団を立ち上げた時には作・演出もされてましたよね。

鈴木：やってたね。

大河原：作・演出から、だんだんとプロデューサーとしての才覚というか、やっぱり劇団の立ち上がり自体が、ご飯を食べられるようになろうよだったり、そういうなんか、みんながこれを職業にできるようにっていうところからのスタートだと思うので、やっぱりそっちの制作的なものっていうほうが、何年ぐらいから強く。でも仕事はたぶん、舞台監督とかやんなきゃいけないっていうのもあったと思うんですけど。ご自身ではどっちが楽しかったとか、どっちが自分らしいとかっていうのは、いつぐらいからどんな自覚だったんでしょうか？

鈴木：タイムライン的に言うと、高校卒業してすぐに、おカネもらえるようになったのは、大道具とか舞監の仕事だから、それこそ25ぐらいまでは舞台監督がメインだったはず。収入も自分の割く時間も。徐々にグラデーションで制作の意識も芽生えて、要は、いくつだろう、僕が26とか27ぐらいに杜劇祭が始まる

から。その時、声かかってるってことは、その時点で、きらく企画を中心に制作の働き始まってたんだろうなと思うんだよね。っていうのが全体。だから、20 代の中で大きくグラデーションがある。これは、ぶっちゃけコロナが始まるまでそうだったけど、ついこの間までそうだったけど、僕ね、どっちも楽しいんだよね。どっちも楽しいから、別にどっちって言う必要ねえかなって思ってずっとやってきてるけど、これがメリットでもあり、デメリットでもあるから僕にとっては。なので、ずっとこれは苦しみ続ける要素かな、個人的な中ではって感じ。でもきっかけはやっぱり震災で。ARCT やって一切現場なくなって、当然舞台の仕事はないから、マネジメント側の仕事をするようになるっていうのが、明らかに制作側を加速させたよね、僕の中で。

大河原：で、2012 年に boxes を立ち上げる。

—boxes の話をじゃあ、聞いてもいいですか。震災があって、ARCT の事務局をやって、その中で boxes を立ち上げていこうっていうふうに考えたんですか？

鈴木：そうだね。

—元々あったのか。

鈴木：ないない。全くない。今、boxes って取締役は仙台の遠藤眞有美と舞台監督の福澤諭志とゴーチブラザーズの伊藤達哉の 4 人が取締役なんだけど。僕は全く会社にする、会社を作るなんてイメージはなくて、福澤さんと達哉さんに作れって言われたから作ったくらい、自主性はないね。主体性はなかった、立ち上げる時。なんでそう言われてるかも、最初の 1 年ぐらいちょっとよく分かってなかったけどね。今思うと、そうかな。でもやっぱり、ARCT の活動っていろんな意味で大きかったから、僕自身に対してもだし、当然、世界的に見ても非常に大きな出来事だったと思うから、あそこで培われたいろいろなことが、やっぱり平常化していくと消えてくし忘れるんだよね、みんなね。今のコロナもそうだけど。なんか、あれだけ苦労したことを、忘れるじゃない人ってね。わざわざきついことずっと、脇に置いておく必要はないから。それがね、ちょっと嫌だったっていうのはあって、何か器が必要だなと思って残していく。で、そん時に、信用

してる２人から強く勧められたので、じゃあこれなのかなと思って始めたっていう感じかな。なんかこれも、一貫して最初から一緒で、このままだといかんぞっていう感じ思って、大きないくつかの出来事を経験する度に、じゃあ次のステージにいくために、僕自身もだし僕の周りの人間もだし仙台の演劇界もなんだけど、何が必要かなって思った時に、思い描いてるものを実現するために、自分のベースメントを作っているっていう感じ。毎回毎回。

—boxes を作った時に、思い描いていたものっていうのはなんだったんですか？どこにいこうとしてたか？

鈴木：だから漠然としてたの、だから。たぶんね。会社立ち上げた時も事業計画書とか書くけど、漠然としてたと思うな。東北を盛り上げるとか書いてたと思う。

大河原：それはでもそう思ってた？

鈴木：思ってるけど、会社ってそういうことじゃないから。ビジョンがあって、それにどういう事業と具体的なミッションがあるかってことに関しては、当時思ってたことは書いたよ、全部。だけど、それを着実に一歩ずつ進めて、20 年後にどうしようなんていうようなことではなかったかな。ARCT で得たいろんな関係性と知識を使って、何ができるだろうっていうぐらいな甘い考え方だったのかなって気はしている。

大河原：会社として。だから、おそらくは劇団っていうものだったり、劇団っていうかプロデュース集団っていう形だったり、演劇を生業とするんだ、これで飯を食うんだってしてたきらく企画から一度離れてというか、それが一度、第１章として終わったあとに、会社もたぶん、同じようなマインドだったのかなとっていうふうに少し思っていて。演劇でご飯を食べていく、演劇に携わる仕事を続けていく箱っていう形で、boxes っていうものが誕生したんじゃないかなと思ってるんですけども。やっぱり劇団、任意団体というか、皆でお金を出し合ってやっていくっていう劇団と、お給料払わなきゃいけないとか、保険を払わなきゃいけないとか、税金を払ってっていう会社、だいぶ違うじゃないですか？　そこでの

マインドの差というか、責任感みたいなのとか、気持ちの違いっていうのはありました？　それとも結構、同じような気持ち。割とアットホームなというか、boxes さんとこも何度も行ってますけど、なんかすごく劇団みたいだなって思う瞬間があるので、どんな違いがあるのかな？

鈴木：それはたぶん、boxes が特別という意味ではなく、一般論として、やっぱり劇団の運営の、なんというか、未成熟さと、社会の中で行われている活動だよね、演劇だってね。だから、社会のルールに従って活動する会社のギャップはすごい感じるし、学んだよね、自分もね。みんな、自分を含めてね、演劇業界、もっともっと勉強しないといけないなだって、毎年のように思ってる。今も。どんなに、どんなに些細な、どんなにちっちゃな小売店ですらやったんだ、やっぱり。ちゃんと決算を出して、税金を納め、お給料払って申告してって、やってんだよね。それをやっぱり、この業界は比較的、これ僕もう、完全先輩たちが悪いって思ってるけど、ないがしろにしてるよなと思うと、その状態で社会にもっと浸透してくれ、観てくれって言えんよなって思ってる。今は。これ、コロナでも改めてまた思ったし。だから、そこはね。僕が会社を立ち上げる時に、ふわっと立ち上げてるっていうことにももちろん起因してると思うけど、一般論としてそこに差は相当あるなっていうのは今だに思うかな。

大河原：どちらかというと、今のほうが水が合っているというか、自分の性格的にも気持ちがよく仕事ができるっていう感じですか？

鈴木：どうかな。でもそうかもね。イエスだと思います。その質問には。アングラ的に演劇をやり続けたい人は、別に会社なんか作る必要ないし、所属する必要もないと思うけど。僕は社会の中で演劇が認められたいし、社会の中で食っていきたいと思ってるから、会社のほうが圧倒的に集団性として。

大河原：拓さんにとっての演劇ってなんですか？　最後の質問です。

鈴木：なんだろうね。言語化できないかもね、まだね。
　ちょっとさっきの準介話したことで言うとね、僕は、なぜ小劇場が機能しなくなってきてるのかっていう話の理由を問う時に、僕は、演劇界側に問題があると

思ってるの。だけど、大半の人は社会側のせいにするのね。もうその時点で、全然違うなと思っちゃう、僕的には。だって、そんなわけない、そんなわけない、社会なんて、政治家だって思い通り動かせない、よく分からないもんなわけだよね。すごく巨大で意思なんかなくて、あるけどないっていう、本当によく分からないもののせいなわけがないんだよ。むしろそこで生きてるんだしって思うから。どうなりたいかによるんだけど、もちろんね。年に２回ぐらい公演を打って、５人ぐらいの劇団員を食わせたいなら、あると思うよ、やり方。だけど、あると思うっていうのもおかしいけど。どこが目標値かによるんだけど、この小劇場界が苦しくなってるのは事実だと思うのね。それは、小劇場、演劇人側に問題がある、課題があると思ってるんだよね。そこにちゃんと向き合って、演劇人が、その地域ごとの演劇人でもいいから、その課題と向き合って話した上で、これがあれば突破できるんじゃないかっていうものを事業団とかに提案するなら分かるんだけど。そういう生き物でもないんだよね、演劇人って。やっぱり作品の力で突破したいし、パフォーマンスで突破したいって、根っこでやっぱり思ってるから。で、それ正しいからね。クリエイターとパフォーマーとしてはそのほうが信頼できるし。だから。これをだから僕が仙台で、仙台に居を構えて仙台にある制作会社の人間の僕が、これを仙台で言うということの矛盾もめちゃめちゃ感じるわけよ。よく分かんない、自分でも。何言ってんだろうなって思ってる自分もね。だからこれが、冒頭からずっと言ってるギャップだし、それにもう苦しみ続けてるし僕は。でもね、なってないんだから、突然なる可能性もあるじゃん。物事って。だから地方のほうが、東京よりかはたぶん変化の可能性はあるよって思ってるから、仙台にい続けてるし、みたいな感じなんだけどね。